コロナ禍の在宅医療と家族の“左様なら”

室蘭市医師会
北海道家庭医療学センター／本輪西ファミリークリニック
佐藤弘太郎（さとうこうたろう）

新型コロナ感染症の流行に伴い、病院や施設など家族の面会制限をしているところも多いかと思います。そのためか否か昨年度から、30～50歳台の癌患者さんが最期の時を自宅で家族と共に過ごしたいと当院の訪問診療へ紹介いただくことが多くなりました。ただ大半の方は残念なことに数日から長くても１ヵ月以内の短い関わりです。おそらく病棟主治医より化学療法の終了や全身状態の悪化の説明を受けて、本人とご家族の決断あってのことだと思います。そのような中、本人や家族と方針を確認し、信頼関係を構築し、多職種で同じ方向を向きつつ症状緩和をはかり、本人や家族の時間の邪魔をしないようそっと、でも時に力強く伴走するという意義深くも難しい挑戦をしています。退院された方々から話を聞いてみると、家族と自由に会えないのが辛かった、子どもが病棟に入れないので、市外に住んでいる兄弟が来られない、など「家族との関係性」を大切に考えている語りが多くありました。コロナ禍前は、「自宅」という安心できる場所へのこだわりや、好きな時に寝て好きなものを食べて…と「自由に自分らしく」過ごしたい、という語りの方が多かったような私の印象でした。

さて、ここでふと思い浮かんだキーワードが「あいまいな喪失」[1]という言葉です。災害など行方不明者の家族に対して使われる場面が多いようですが、コロナ禍で家族が本人と会えないまま「さようならのない別れ」となったとしたら、あいまいな喪失と同様の心象になるのではないでしょうか。それを無意識的に予防するために家族を含めて自宅退院を選択しているのかもしれません。「死に目に会う」という言葉もありますが、息をしている間に顔をのぞきこむ、呼吸の音を聞く、体に触れて温かさを感じる、最期の言葉をかける、という一連の状態の確認とそのような五感を通じた体験をもとにした「左様（そのよう）であるならば」[2]という覚悟にも似た現状認識、腑に落ちて理解する感覚です。本人の立場からも、後に残す家族、兄弟などと直接交流できるのは貴重な時間となっているでしょう。本人の意志を支援するのはもちろんですが、家族の「さようなら＝左様であるならば」の腹落ち感に丁寧に時間をかけること、さらに「さようであるならば…」にひそむ悲しみ、もう一歩進むなら「次はじゃあどうする」へ進んでいけるような準備も在宅医療の１つの重要な役割だな、と思う今日この頃です。今までの患者さんたちと私の「左様なら…」も、おかげさまで今回の寄稿の着想を得ることにつながりました。合掌。

1）黒川雅代子他．あいまいな喪失と家族のレジリエンス：災害支援の新しいアプローチ．誠信書房，2019
2）竹内整一．やまと言葉で哲学する：「おのずから」と「みずから」のあわいで．春秋社，2012.

子どもを育てるということ

札幌市医師会
ときわこども発達センター
白石（しらいし）　映里（えり）

私には小６と小２の娘がいる。

高校生の頃の私は、「仕事をしたいから結婚しないよ」と父に宣言し、「結婚しないと社会のつまはじき者になる」と心配されたこともあったが、父母が諦めかけていた30代最後の年に結婚し、すぐに出産した。ただ、社会の風潮はいつの間にか変化しており、未婚でも「つまはじき者になる」ことはなく、私の姉などは独身で自由を謳歌しているようにも見える。

私の母は専業主婦で、学校から帰るといつも自宅で出迎えてくれたが、真面目な性格の母は手抜きすることなく家事に勤しんでおり、何かをしてゆっくりと一緒の時間を過ごした記憶はない。掃除をしたり、ごはん支度をしたり、家庭菜園で作業をする母のそばで、いつも私はその日の出来事やそれをどう思ったかを一人延々と話していたように思う。母は、私の話を「うん、そうなんだね」「えらいね」「すごいね」などと言いながら家事の手を休めることはないが、ただただ、聞いてくれていた。

私は子育てをするようになって、よく自分の子どもの頃を振り返るようになった。いつもよく見ていた夢の意味も今なら合点がいくこともある。自分の子どもの成長に合わせて、私の人生の振り返り地点も成長した自分となる。

子育ての意義は、これまでの自分自身の生き方や感じ方を整理したり、自分の親の思いへの気づきなどにもあるのかもしれない。

母が実際どう感じながら子育てをしていたのか尋ねる勇気は今だにないが、母の日に渡す「お母さんいつもありがとう」のメッセージカードに込めた気持ちは、自分自身が子育てを経験したことでより深いものになったことは間違いない。

私は仕事柄子育てで苦労されている親御さんの相談を受けることが多い。実のところ、私自身も上手に子育てできている自信は全くなく、相談に来られる親御さんに、子どもの言葉に耳を傾けるよう助言しながら毎日自省するばかりである。